

旧石器時代の女性像と線刻棒

Female Figurines and Batons Engraved with Sexual Symbols
in the World Palaeolithic Age

春成秀爾

HARUNARI Hideji

① 序 説

② 後期旧石器時代前半の女性像

③ 後期末～晩期旧石器時代の女性像

④ 後・晩期旧石器時代の線刻棒

⑤ 後 説

図版 旧石器時代女性像集成

【論文要旨】

ユーラシアの後期旧石器時代前半、オーリニャック期の約40,000年前に出現し、グラヴェット期の約33,000～28,000年前に発達した立体女性像は、出産時の妊婦の姿をあらわし、妊娠・安産を祈願する護符の意味をもっていた。しかし、グラヴェット期後半の約24,000年前に女性像は消滅する。そして、後期末～晩期旧石器時代マドレーヌ期の約19,000年前に線刻女性像や立体女性像が現れ、その時期の終わり頃の約14,000年前に姿を消す。

日本では、大分県岩戸遺跡出土の石製品が女性像とすれば約25,000年前で、もっとも古い。愛媛県上黒岩遺跡から出土した立体女性像の石偶は14,500年前で、その後、13,000年前頃には三重県粥見井尻遺跡の土偶があり、縄文早期以降の発達の先駆けとなっている。

後期末～晩期旧石器時代の立体女性像は、フランスのロージュリー＝バス型、ドイツを中心とするゲナスドルフ型、ロシア平原のメジン型、シベリアのマイニンスカヤ型、日本の上黒岩型と粥見井尻型、相谷熊原型を設定することができる。ロージュリー＝バス型はアングル＝シュール＝ラングラン型の岩陰の浮彫り女性像に、ゲナスドルフ型はラランド型の岩陰の線刻女性像またはホーレンシュタイン型の板石の線刻女性像に起源がある。

ゲナスドルフ型の立体女性像は、腹部のふくらみはなく、乳房を表現した例は少なく、妊婦をあらわしているようにはみえない。しかし、ラランド型の線刻女性像に先行するベック＝メルル型の線描女性像は、妊婦の姿をあらわし、さらにラ＝マルシュ型の線刻女性像は出産時の妊婦を表現している。ゲナスドルフ型の立体女性像も、妊婦を記号化した表現と理解するならば、後期末～晩期旧石器時代の立体女性像も、後期旧石器時代前半の立体女性像と同様、妊娠を折り出産を願う呪いに使った可能性が大きい。その背景には、最終氷期の極相期がつづくなかで世界的に人口が減少していた、あるいは不妊の傾向が顕著にあらわれていたという事情があったのであろう。

ユーラシアには男根形の象牙に記号化した女性器を表現した男女交合の象徴物がある。ロシア平原のメジン遺跡の旧石器人は家屋内で、羽状文を施したマンモスの頭骨、下顎骨、肩胛骨を女性器にみたて、牙製の男根形拍子木でたいて一種の音楽を奏でていた。立体女性像を妊娠・出産にかかわる護符とみるならば、それは妊娠あるいは出産を促す呪いの演奏であらう。上黒岩遺跡出土の棒状の石に羽状文や三角形を彫った線刻棒も、同様の目的をもって使用していた可能性がある。

【キーワード】 上黒岩、旧石器時代、線刻棒、女性像、妊娠・出産、ユーラシア